

先史アジア語とその残影 (4)

近 藤 健 二*

はじめに

この稿で新たに取りあげる言語は朝鮮語である。朝鮮語と周辺諸言語との関係、とくに朝鮮語が隣接言語である中国語や日本語と系統的につながっているかどうかを明らかにすることが本稿の目的である。このような問題設定は荒唐無稽で、的なきに矢を放つようなものと思われるかもしれない。というのも、朝鮮語と日本語の系統関係はおくとして、朝鮮語と中国語は明らかに起源の異なる言語であると一般に信じられてきたからである。しかし多くの紙幅をついやしたここまでの論考で、日本語と中国語との間に先史時代にまで遡る音韻対応の存在することが判明した。朝鮮語と中国語との間にも、このような音韻対応が認められる可能性はある。むしろ、朝鮮半島と中国大陆との地理的關係を考慮すれば、それらの地域で話されていた言語はもとは一つであったことを示す証拠が音韻対応という形で発見される可能性は高いと言える。

すでに述べたように、音韻対応というのは同系言語間に見られる音の規則的な対応関係である。したがって、二つの言語の固有語間に音韻対応が認められれば、それらの言語は同系言語であると認定されるが、音韻対応が認められなければ、それらの言語は同系言語であるとは言えない。このように音韻対応の有無が、同系言語であるかどうかを判別する決め手となる。これ以外の方法はあまりあてにならない。とくに系統の議論に言語類型の問題を絡ませると、真理は遠くへ逃げていってしまう。言語類型は変わりうるものであるから、その異同を基準にして系統の異同を論じるわけにはいかないのである。

このように系統の議論に音韻対応の議論が不可欠であるとして、二つの言語が同系であるかどうかはどのようにしたら分かるのか。これは同源の語を探すことによって可能となる。音韻対応は、同系言語間の同源の語に見られるからである。そして同源の語は、二つの言語にまたがる同義語あるいは類義語が形態的に似ているかどうかを調べることによって発見される。これが同時に、音韻対応のあるなしを判断することにつながるのである。このことを、中国語と日本語を例に出して説明してみよう。

*人文学部教授一言語学

- 竹 (tiok > tɕú, 呉(漢)チク) 「たけ」 ↔ 竹 (taka・takë)
 煮 (tiag > tɕŭ, 呉(漢)シヨ) 「にる・にえる」 ↔ 焚く (taku)
 詔 (tiag > tɕào, 呉(漢)セウ) 「つげる・みことのり」 ↔ 告ぐ (tugu)
 塚 (tiun > tɕŏŋ, 呉チュウ, 漢チヨウ) 「つか」 ↔ 塚 (tuka)
 剔 (tʰek > tʰi, 呉チャク, 漢テキ) 「そぐ・けずる」 ↔ 削ぐ (sogu)
 醜 (tʰiog > tɕʰŏu, 呉シュ, 漢シウ) 「みにくい」 ↔ 醜 (sikö)
 透 (tʰog > tʰŏu, 呉ツ, 漢トウ) 「すく・すける」 ↔ 透く (suku)
 釈 (thiak > ɕi, 呉シャク, 漢セキ) 「とく・とける」 ↔ 解く (toku)
 即 (tsiæk > tɕi, 呉ソク, 漢シヨク) 「つく・くつつく・すなわち」 ↔ 付く (tuku)
 酒 (tsiog > tɕiŭ, 呉ズ・ズウ, 漢シウ) 「さけ」 ↔ 酒 (saka・sakë)
 提 (deg > tʰi, 呉ダイ, 漢テイ) 「さげる」 ↔ 提ぐ (sagu)
 淘 (dog > tʰáo, 呉ダウ, 漢タウ) 「(米を) とぐ」 ↔ 淘ぐ (togu)
 斜 (diäg > ɕié, 呉ジャ, 漢シャ) 「ななめ・さか」 ↔ 坂 (saka)
 席 (diak > ɕi, 呉ジャク, 漢セキ) 「むしろ・しく」 ↔ 敷く (siku)
 床 (dzian > tɕʰán, 呉ジャウ, 漢サウ) 「とこ・ゆか」 ↔ 床 (tökö)
 助 (dziag > tɕŭ, 呉ジョ, 漢ソ) 「たすける・たすけ」 ↔ 助く (suku)
 漬 (dzieg > tɕi, 呉ジ, 漢シ) 「つける・ひたす」 ↔ 漬く (tuku)
 鷲 (dziog > tɕiŭ, 呉ジュ, 漢シウ) 「ワシ」 ↔ 鷹 (taka)
 淙 (dzon > tɕʰŏŋ, 呉ズ・ズウ, 漢ソウ) 「たき・瀑布」 ↔ 滝 (taki)
 嗣 (ziäg > si, 呉ジ, 漢シ) 「つぐ」 ↔ 嗣ぐ (tugu)
 塞 (sæk > sɕ, 呉(漢)ソク) 「ふさぐ・ふさがる」 ↔ 塞く (seku)
 嗽 (sug > sŏu, 呉ス, 漢ソウ) 「せく・せき」 ↔ 咳く (seku)
 性 (sien > ɕiŋ, 呉シャウ, 漢セイ) 「さが」 ↔ 性 (saga)

これらは、古代中国語の t・tʰ・th・ts・d・ɕ・dz・z・s という音が古代日本語の t・s の音と対応するとともに、古代中国語の k・g・ŋ の音が古代日本語の k・g の音と対応していることを示したものである。このような例を並べたて素直に考えをめぐらしたら、固有の日本語と見られてきた言葉の中に中国語と同源の語が数多く含まれていることが理解される。

以下において指摘しようとするのは、このような語と語、音と音との対応が朝鮮語と中国語との間に、また朝鮮語と日本語との間に観察されるということである。

1. 古代中国語との形態的類似

同源の語の組みあわせには、同源であるとすぐに分かるものから、すぐには分からぬものまで存在する。これは、形態変化の度合いが語によって異なるからである。本稿で取りあげ

る語は、同源であることが総じて分かりやすい。朝鮮語と中国語に関しては、そのようなものを選んでここに載せているからである。一方、日本語には朝鮮語・中国語とかけ離れた形をしたものも含まれている。また、朝鮮語・中国語と同源の語が存在しない場合もある。

1.1. 兎 (tʰag)・時 (dhiəg) などとの対応

この項にあげる朝鮮語は語頭子音が t'・t'・t'f・d̥・d̥・d̥・s であり、これらが古代中国語の t・tʰ・th・ts・tsʰ・d̥・d̥・s という語頭子音と対応している。また同時に、朝鮮語の k・k'・g・ŋ の音が古代中国語の g 音と対応している。以下、中国語と朝鮮語と日本語について同源の語の対応関係を示すが、朝鮮語の動詞・形容詞語尾（基本的には -da）は表記しない。

㊦ 搗 (tog>tǎo, ㊦㊦タウ)「つく・うつ」

㊦ tʃ'ik-「(判などを)つく・(点などを)うつ・つける」

㊦ 搗く (tuku), 撞く (tuku), 舂く (tuku), 築く (tuku)

㊦ 紙 (tieg>tʃi, ㊦㊦シ)「かみ」

㊦ d̥ʒon̆i「かみ(紙)」

㊦ 只 (tieg>tʃi, ㊦㊦シ)「ただ・それだけ」

㊦ od̥ʒik「ただ・ひたすら」

㊦ 只 (tada)

◆ 日本語の tada は同源の語の重複形 *tagutagu の -gu が消失した形であると推定される。朝鮮語の od̥ʒik も同種の重複形 *d̥ʒikd̥ʒik が弱化した形であろう。

㊦ 鳥 (tög>tiau, ㊦㊦テウ)「とり」

㊦ d̥ak「にわとり」

㊦ 拆 (tʰāk>tʃʰai・tʃʰɛ, ㊦チャク, ㊦タク)「ひらく・さく・やぶる」

㊦ d̥ʒ'age-「ふたつにわる・さく」

㊦ 割く・裂く (saku)

㊦ 土 (tʰag>tʰü, ㊦ツ, ㊦ト)「つち・大地」

地 (dieg>tí, ㊦ヂ, ㊦チ)「つち・大地」

㊦ t'ar̆j「つち・地・土地・地面・陸」

㊦ 処・所 (tö・to)

処 (ka)

- ◆ 日本語の tö・to は古代中国語 t^hag・dieg の t^h-・die- や朝鮮語 t'anj の t'a- に対応する。また、日本語の ka は同じ古代中国語の -g や朝鮮語の -ŋ に対応する。ちなみに、場所を表す「ここ (kōkō)」と「そこ (sōkō)」の -kō は ka に対応する形であり、「あしこ (asiko)」と「あそこ (asoko)」の -siko・-soko は祖形に近い形をとどめていると考えられる。

㊦ 兎 (t^hag>t^hù, ㊦㊦ツ, ㊦㊦ト)「ウサギ」

㊦ t^hok'i「ウサギ」

㊦ 兎 (usagi)

- ◆ 日本語の usagi は、同源の語を重ねた *tukusagi のようであったと推定される。ちなみに、ツングース諸語の中の一つであるウイльта語に同源と見なされる tuksa「ウサギ」という語がある。

㊦ 癩 (t^hiëg>tɕĩ, ㊦㊦㊦チ)「おろか・たわけ」

㊦ ɔrisɔk-「おろかだ・ばかだ」

㊦ 疎か (örösöka)

疎か・愚か (öröka)

- ◆ 『岩波古語辞典』によれば、日本語の örösöka は örö- が「アラ（粗）の母音交替形。ものごとが密でないこと、すきまの多いさま。粗略なこと」であり、-söka は「状態をあらわす接尾語」とあるという。また、öröka は「オロ（疎）カ（様子）」で、間隙が多く、おおざっぱ、いい加減の意。転じてうすのろ、馬鹿だ、馬鹿馬鹿しいさま」であるという。しかしこれでは、朝鮮語の ɔrisɔk- との形態的類似性を説明できない。私の考えでは、-söka は古代中国語の t^hëg や朝鮮語 ɔrisɔk- の -sɔk- と同源である。そして、-öröka の -ka は -söka の -sö が失われた形である。

㊦ 暑 (thiɔg>ɕũ, ㊦㊦㊦ショ)「あつい」

㊦ t'agap-「焼けつくようにあつい」

t'igɔp-「あつい（熱い・暑い）」

- ◆ 朝鮮語における -ap-・-ɔp- の由来は不詳である。

㊦ 少 (thiɔg>ɕǎo, ㊦㊦㊦セウ)「すくない・すこし」

㊦ dɕɔ:k-「すくない」

㊦ 少なし (sukunasi)

少し (sukosi)

少しき (sukosiki)

- ◆ 「ちいさいこと・すくないこと」を意味する日本語の *sukosiki* は同源の語を重ねた形であり、*sukosi* は語末の *-ki* が消失した形であろう。

中 書 (*thiag* > *ṣū*, 呉(漢)シヨ) 「かく・ふみ」

朝 *dʒɔk*- 「しるす・記録する・かぎつける・かぎとめる」

中 守 (*thiog* > *ṣōu*, 呉シヨ・ス, 漢シウ) 「まもる・まもり」

朝 *dʒik*- 「まもる」

日 守る (*moru*)

- ◆ 日本語の *moru* は、先の稿で述べたように、古代中国語 *thiog* の *thio-* に対応する音が失われるとともに、*-g* に対応する *mo-* に動詞語尾の *-ru* が付加された形である。後にふれるように、*g* 音から *m* 音への変化は朝鮮語でも起こっている。

中 詐 (*tsäg* > *ṣà*, 呉シャ, 漢サ) 「いつわる・あざむく」

朝 *sogi*- 「だます・あざむく・いつわる」

中 組 (*tsag* > *tsŭ*, 呉ス, 漢ソ) 「くみひも・くむ・くみ」

朝 *tʃ'ak* 「つい(対)・くみ(組)・(対をなすものの)一方」

中 子 (*tsiag* > *tsŭ*, 呉(漢)シ) 「こ・むすこ」

朝 *sək'i* 「こ(子)・ひな(雛)」

日 背子 (*seko*)

子 (*ko*)

- ◆ 日本語の *ko* は、古代中国語 *tsiag* の *tsiə-* に対応する音が失われた形である。

中 滓 (*tsig* > *tsŭ*, 呉(漢)シ) 「かす・けがれる」

朝 *tʃ'ik'ɔgi* 「おり(澱)・かす」

中 刺 (*ts^hieg* > *tsŭ*, 呉(漢)シ) 「さす・とげ」

朝 *t^huk* 「(突きでるさま) ひょこっ・ぼこっ・つくん」

日 刺 (*toge*・*togi*)

土筆 (*tukusi*)

研ぐ (*togu*)

尖る (*togaru*)

- ◆ 日本語の *tukusi* は同源の語を重ねた **tukutuku* に由来する形であろう。

㊦ 炒 (ts^hǝg > ts^hǎo, ㊦㊦セウ) 「いためる・いる」

㊦ tek- 「いためる・いる」

㊦ 潮 (diǝg > ts^hǎo, ㊦ヂウ, ㊦テウ) 「しお」

㊦ sogim 「しお (塩)」

㊦ 潮・塩 (siϕo)

◆ 朝鮮語 sogim の -m は「もの」を表す接辞か。日本語 siϕo の -ϕo は古代中国語 diǝg の -g に対応する。g 音から ϕ 音への変化は多くの語で観察される。

㊦ 猶 (diǝg > yóu, ㊦ユ, ㊦イウ) 「のばす・なお・まだ・やはり」

㊦ adʒik 「まだ・いまだに・いまなお」

◆ 朝鮮語 adʒik は同源の語を重ねた *dʒikdʒik のような形に由来すると推定される。

㊦ 遊 (diǝg > yóu, ㊦ユ, ㊦イウ) 「あそぶ」

㊦ ㄱᄃᆞᆫᆫᆞᆫ 「あそび・たわむれ・いたずら」

㊦ 遊ぶ (asobu)

遊ぶ・荒ぶ (susabu)

すさむ (susamu)

◆ 朝鮮語 ㄱᄃᆞᆫᆫᆞᆫ の -nan は「こと」を意味する接辞か。日本語の asobu・susabu・susamu は同源の語を重ねた *sagusagu あるいは *sogusogu のような形に溯ると推定される。これまでに何度もふれたように、k・g・ŋなどの音が b や m の音に転じた例は数多く存在する。

㊦ 時 (dhiǝg > ʃí, ㊦ジ, ㊦シ) 「とき」

㊦ ㄱᄃᆞᆫ 「とき (時)・ころ (頃)・おり」

㊦ 時 (töki)

㊦ 殊 (dhiug > ʃū, ㊦ズ・シュ, ㊦シュ) 「たつ・しぬ・ことなる」

㊦ ㄱᄃᆞᆫ- 「しぬ・息がたえる」

㊦ 尽く (tuku)

㊦ 小 (siǝg > ɕiǎo, ㊦㊦セウ) 「ちいさい」

㊦ ㄱᄃᆞᆫ:ᆫ- 「ちいさい・みじかい・ひくい」

㊦ 小さし (tiϕisasi)

- ◆ 日本語 tiφisasi の前身は同源の語を重ねた *tiφisaφasi であったと推定される。この語における φ の音が古代中国語の g の音、および朝鮮語の k の音と対応するものであることは言うまでもない。

㊦ 笑 (siog > çiao, ㊦㊦セウ) 「わらう」

㊦ sangit 「にこつと・にっこり」

㊦ 数 (süug > sù, ㊦㊦シュ, ㊦㊦ス) 「かず」

㊦ sak · tʃʰok 「かず (数)」

㊦ 数 (kazu)

- ◆ 日本語の kazu は、その前身が *zukazuka のような形であり、「続く (*tukuduku > *tuφuduku > tuduku) や「次次 (tugitugi)」のように連続性をイメージした語であったと推定される。

㊦ 繰 (sog > sào, ㊦㊦サウ) 「くる・たぐる」

㊦ dagi- 「ひきよせる・くりあげる」

㊦ 繰る (kuru)

- ◆ 日本語の kuru は、古代中国語 sog の so- や朝鮮語 tuku- の tu- に対応する音が失われ、動詞語尾として -ru が付加された形である。

1.2. 架 (kär) ・ 回 (fiuər) などとの対応

ここで扱うのは、朝鮮語の g · g · k' · k^h · n という音が古代中国語の k · ŋ · fi · x の音と対応するとともに、朝鮮語の r · l 音が古代中国語の r 音と対応する場合である。このような音韻対応は、朝鮮語と古代中国語以外の言語でも広く観察することができる。しかし日本語には、このような音韻対応を示す語は多くない。

㊦ 架 (kär > tciä, ㊦㊦ケ, ㊦㊦カ) 「たな・かける」

㊦ goll- 「ひっかかる・つかえる」

㊦ 稽 (ker > tci, ㊦㊦ケ, ㊦㊦ケイ) 「くらべる・比較する」

㊦ gari- 「えらぶ」

㊦ 競ぶ (kurabu)

- ◆ 日本語 kurabu の -bu は付加された動詞語尾である。kurabu は「繰る (kuru)」と「合ふ (aφu)」が合わさった形で、「繰り合わせて、物を比較すること」(『岩波古語辞典』)とするのには賛成できない。

中 過 (kuar>kuò, 呉漢クワ) 「すぎる・あやまつ・あやまち」

朝 giri- 「あやまっている」

中 鍋 (kuar>kuò, 呉漢クワ) 「なべ」

朝 girit 「うつわ (器)・容器」

中 溪 (k^her>t^hçī, 呉ケ, 漢ケイ) 「たに」

朝 gol 「ほら (洞)」

goltʃʰagi 「たに (谷)・谷間」

日 くら谷 (kuratani)

◆ 朝鮮語 goltʃʰagi の -tʃʰagi は、次の中国語および日本語と同源であろう。

洞 (duŋ>tòŋ, 呉ツウ, 漢トウ) 「ほら・ほらあな」 ↔ 谷 (tani)

中 剣 (klam>tçian, 呉コム, 漢ケム) 「つるぎ」

朝 k^hal 「かたな (刀)・つるぎ (剣)・小刀・刃物」

中 険 (xliam>tçian, 呉漢ケム) 「けわしい・切りたっている」

朝 gal- 「とぐ」

中 鑑 (klām>tçian, 呉カム, 漢ケム) 「かがみ」

朝 goul 「かがみ」

中 路 (glag>lù, 呉ル, 漢ロ) 「みち」

朝 gil 「みち (道)」

日 畔 (kuro)

◆ これらの語は「ぐりりとつながって連絡しあったもの」というのが原義であり、次の語と同源である。

絡 (glak>luò, 呉漢ラク) 「まとう・からむ・からます」 ↔ 絡ぐ (karagu)

中 轆 (glök>li, 呉リャク, 漢レキ) 「ひく」

朝 k'i:l- 「ひく・ひきづる」

日 車 (kuruma)

◆ これらの語は、「ころころと転げるさま」をイメージした語であつたと考えられる。この意味において、「ころころ (korokoro)」や「ごろごろ (gorogoro)」, また「くるくる (kurukuru)」や「ぐるぐる (guruguru)」といった語とも縁が近い。

- ㊥ 楽 (ŋlok>lɤ̃, 呉(漢)ラク)「たのしむ・たのしい・たのしみ」
 歌 (kar>kɤ̃, 呉(漢)カ)「うた・うたう」

- 朝 no:1-「あそぶ・たのしむ」
nori「あそび・～ごっこ」

- ☐ 海月 (kurage)

◆ 古代中国語 *ŋlok* の本来の意味は「音楽・かなでる」であった。そしてこの語は音楽を「まがりくねるような音」としてイメージしたことにより生まれたと考えられる。また、古代中国語の *kar* と日本語の *kurage* はそれぞれ「のどで声を曲折させて節をつける」イメージと、「くらりくらりと海中を漂う」イメージに根ざした言葉であると考えられる。

なお、中国から伝わった二人で行う室内遊戯「双六 (sugurōku>sugoroku)」の -gurōku・-goroku はこれらの語と同源のように思われる。「双六」は「双陸」とも書いたので、「六」と「陸」は当て字であろう。また、「神楽 (kagura)」の -gura もこれららの語と同源の形態ではないかと考えられる。この kagura について「カミクラ (神座) の約。クラは神おろしをする所。この舞楽に使う榊木や篠などに神が降下するので、その神・篠・杖・弓などをカミクラと称したのが、後にこの舞楽全体の名となった」(『岩波古語辞典』) という説はあやしい。

- 〔中〕 河 (har>xɾ, 吳ガ, 漢力) 「かわ」

- 朝 gɛul 「小川・せせらぎ」

◆ 古代中国語 *fiar* は「たびたび直角に屈曲する黄河」のイメージに根ざした語であり、上記の古代中国語 *ŋlɔk* (楽) や *kar* (歌) と同源である。また、日本語の「くるくる (*kurukuru*)」などとも縁が近い。

- 〔中〕 𠂔 (fier>ci, 呉ゲ, 漢ケイ) 「かくす」

- 𠙴 (huər>wéi, 呉工, 漢斗) 「かこむ・かこみ」

- 懷 (huǎi>xuái, 呉エ, 漢クワイ)「いづく・ふところ・おもう」

- 朝 gari- 「さえぎる・かくす・ふさぐ」

- giri- 「恋いしたう・なつかしくおもう」

- gurim 「くも (雲)」

- ㊦ 包む (kurumu)

- 胡桃 (kurumi)

- 衣 (kөрөмө)

◆ 朝鮮語の *gurim* は、「日の光をさえぎるもの」というのが原義であろう。

- ㊦ 回 (fiuər > xuí, ㊦エ, ㊦クワイ) 「まわる・まわす」
塊 (kʰuər > kuài, ㊦クエ, ㊦クワイ) 「つちくれ・かたまり」

- ㊦ 朝 ġuri- 「ころがる」
gori 「わ (輪)」
ġokʼurɔdʒi- 「ころぶ・たおれる」
giul- 「かたむいている・かたむく・暮れる」
giurɔdʒi- 「かたむく」
mikʼirɔdʒi- 「すべる・ころぶ」
ɔsillonġori- 「ゆつくりと歩きまわる」
ɖuŋgil- 「まるい・まんまるい」

- ㊦ 転ぶ (korobu)
塊 (kure)
頃 (körö)

- ◆ これらの語は「回転・転倒・円形・球形」にかかわる語であり、日本語の「ころころ (korokoro) や「ごろごろ (gorogoro)」, また「くらくら (kurakura) や「ぐらぐら (guragura)」なども同種の語である。ちなみに、日本語の körö は「経過して行く時間・季節について、およその見当をつけ一点を中心に、その前後をひとかたまりとして把握する語」(『岩波古語辞典』)である。朝鮮語の ġokʼrɔdʒi- の ġokʼro- は *ġorokʼura- の縮約形であり、-dʒi- は mikʼrɔdʒi- の -dʒi- と同様に自動詞化接辞である。また、ɖuŋgil- の ɖuŋ- は次の中国語と同源であると推定される。

㊦ (duan > tʰuán, ㊦ダン, ㊦タン) 「まるい」

さらに、ɔsillonġori- の ɔsillon- は日本語の「漫 (sozoro・suzuro)」や「そろそろ (sorosoro)」に対応する形態であろう。なお、mikʼrɔdʒi- の mi- の由来は不明である。

- ㊦ 嫌 (fiłām > cián, ㊦ゲム, ㊦ケム) 「きらう・いやがる」
㊦ kʼɔ:ri- 「きらう・いやがる」
㊦ 嫌ふ (kiraɸu)

- ㊦ 化 (xuǎr > xuà, ㊦クエ, ㊦クワイ) 「かわる・ばける」
㊦ ġal- 「かえる・とりかえる」

1.3. 低 (ter)・垂 (dhiuar) などとの対応

ここで取りあげるのは、朝鮮語の tʰ・tʰ・tʰ・d・ɖɜ・ɖ・s・sʼ という音が古代中国語の tʰ・th・ts・tsʰ・d・dh・ɖ という音と対応するとともに、朝鮮語の r・l 音が古代中国語の r

音と対応している語である。日本語の音韻対応はそれぞれ t・s 音との対応と r 音との対応という形で観察されるが、その数は少ない。

Ⓖ 抵 (ter>tī, ㊟タイ, ㊟テイ) 「いたる・いたす」

朝 ḡadari- 「いたる・いたりつく」

◆ 朝鮮語 ḡadari- の ḡa- は、次に示す組みあわせの語と同源であろう。

至 (tiē>tṣī, ㊟㊟シ) 「いたる・極点」 ↔ とど (todo) 「終局・最後」

Ⓖ 低 (ter>tī, ㊟タイ, ㊟テイ) 「ひくい・たれる」

坻 (tēr>tī, ㊟タイ, ㊟テイ) 「さか」

朝 tṣʰal- 「みじかい・ひくい」

ḡitʰal 「さか・斜面・勾配・傾斜」

◆ 朝鮮語 ḡitʰal の ḡi- は、次に示す中国語に対応すると推定される。

阪 (bǎn>pǎn, ㊟ベン, ㊟ハン) 「さか・つつみ」

坂 (pǎn>pǎn, ㊟ホン, ㊟ハン) 「さか・つつみ」

Ⓖ 槌 (tuər>tūi・tṣʰuī, ㊟㊟タイ) 「うつ・たたく」

朝 t'eri- 「うつ・たたく」

dudiri- 「うつ・たたく」

◆ 朝鮮語 dudiri- の du- は、次に示す古代中国語 tēj に対応する形であろう。

打 (tēj > tā, ㊟チャウ, ㊟テイ) 「うつ・たたく」 ↔ 叩く (tataku)

Ⓖ 他 (tʰar > tʰā, ㊟㊟タ) 「ほか・ほかの」

朝 ḡalli 「異なつて・別々に・ほかに」

Ⓖ 矢 (thier>ṣī, ㊟㊟シ) 「や」

朝 sal 「や (矢)」

hwasal 「や (矢)」

Ⓖ 矢 (sa)

◆ 朝鮮語 hwasal の hwa- は、次に示す古代中国語 kiueŋ が弱化した形であろう。

弓 (kiueŋ>kōŋ, ㊟ク・クウ, ㊟キウ) 「ゆみ」 ↔ 弓 (yumi)

ちなみに、日本語 yumi の yu- は古代中国語 kiueŋ の kiue- に対応し、-mi は kiueŋ の -ŋ に対応する形である。

Ⓖ 躋 (tser>tṣī, ㊟サイ, ㊟セイ) 「のぼる」

朝 t'oori- 「(空中に) うかびあがる・のぼる」

- ◆ これらの語は古代中国語の *tiuər*（隹）「とり」やアイヌ語の *cir*「とり」と、また日本語の *tōri*（鳥）と同源であろう。さらに、上記の古代中国語 *thier*（矢）「や」と朝鮮語 *sal*「や（矢）」もこれらの語と縁が近いように思われる。

㊦ 嘴 (*tsiuər* > *tsui*, ㊦漢スイ)「くち・くちばし」

㊦ *ips'ul*「くちびる」

- ◆ 朝鮮語 *ips'ul* の *ip-* は「くち・くちびる」という意味である。そして、次に示す組みあわせの語と同源であろう。

㊦ (*·äp* > *wā·āo*, ㊦エフ, ㊦アフ)「くぼむ・くぼみ」↔ 言ふ (*iφu*)

日本語 *iφu* の *-φu* は *-pu* に由来する音であると考えられる。

㊦ 剝 (*ts^huar* > *ts^huò*, ㊦漢サ)「きる・きざむ」

㊦ *d̥ʒəri-*「きる・たつ・切断する」

- ◆ 日本語の「剣 (*turuki·turugi*)」は、これらの語と関係がありそうに思われる。

㊦ 馳 (*diar* > *t̥ʂ'i*, ㊦チ, ㊦チ)「はせる・はやくはしらせる」

㊦ *d̥alli*「はしらせる」

㊦ 遲 (*dier* > *t̥ʂ'i*, ㊦チ, ㊦チ)「おそい・おくれる」

㊦ *sa:lsal*「そっと・そろそろ」

㊦ そろそろ (*sorosoro*)

㊦ 墮 (*duar* > *tuò*, ㊦ダ, ㊦タ)「おちる・おとす」

墜 (*diuər* > *t̥ʂui*, ㊦ツイ, ㊦ツイ)「おちる・おとす」

㊦ *t'orət'ri-*「おとす・はらいおとす・うちおとす・きりおとす」

t'orəd̥ʒi-「おちる・落下する」

- ◆ 朝鮮語 *t'orəd̥ʒi-* の *-d̥ʒi-* は自動詞化接辞である。

㊦ 垂 (*dhiuar* > *t̥ʂ'ui*, ㊦ズイ, ㊦スイ)「たれる・たらす」

㊦ *d̥al-*「つるす・たらす・かかげる」

d̥alli-「ぶらさがる・かかる」

㊦ 垂る (*taru*), 垂らす (*tarasu*)

釣る (*turu*), 吊る (*turu*)

- ◆ これらの語は上記の古代中国語 *duar*（墮）などと同源である。また、次にあげる古代中国語 *dhiuar*（睡）などとも縁が近い。

㊦ 睡 (dhiuar > sui, ㊦ズイ, 漢スイ) 「ねむる・ねむり」

㊦ dʒo:l- 「うとうとする・まどろむ」

㊦ 微垂む (madoromu)

蕩めく (toromeku)

- ◆ 日本語 madoromu の ma- は「目 (ma・mē)」と同源で、-mu は付加された動詞語尾である。また、「うとうとする」を意味する toromeku の -meku は「舂めく (Φ arumeku)」の -meku と同じ動詞語尾である。なお、日本語の「怠し (tarusi・darusi)」, 「蕩く (toroku)」, 「蕩し (torosi)」などもここにあげた語と同源である。

㊦ 罪 (dzuər > tsui, ㊦ザイ, 漢サイ) 「つみ・あやまち・つみをくわえる」

㊦ dʒɔdʒiri- 「しでかす・やらかす・おかす・しくじる」

- ◆ 朝鮮語 dʒɔdʒiri- の dʒɔ- は、次に示す古代中国語 thiet に対応する形が弱化したものであるかもしれない。

失 (thiet > ši, ㊦シチ, 漢シツ) 「うしなう・あやまち」 ↔ 失す (usu < *susu)

㊦ 施 (diar > yi, ㊦漢イ) 「のびる・のばす・うつる」

㊦ dʒara- 「そだつ・のびる・成長する」

tʃul 「つる (絃)」

㊦ 蔓 (tura・turu), 弦 (tura・turu)

㊦ 随 (diuər > sui, ㊦ズイ, 漢スイ) 「したがう」

次 (tsʰier > tsʰi, ㊦漢シ) 「つぎ・つぐ」

肆 (sier > si, ㊦漢シ) 「つらねる・つらなる」

㊦ t'ara 「～にしたがって・～に応じて・～につれて・～にならって」

t'araga- 「ついてゆく・おってゆく」

deri- 「つれる・ひきつれる・一緒に～する」

sero 「あらたに・さらに・あらためて」

serək 「つぎつぎと・どんどん」

soro 「たがいに・ともに・一緒に」

㊦ 連る (turu)

連ぬ (turanu)

更 (sara), 更更 (sarasara)

- ◆ 朝鮮語 t'araga- の -ga- は次に示す語と同源であろう。

行 (hǎŋ > ɕiŋ, ㊦ギャウ, 漢カウ) 「ゆく」 ↔ 行く (yuku・iku)

日本語 yuku・iku の yu-・i- は ku- が弱化した音であると推定される。

1.4. 披 (p^hiar)・弥 (mier) などとの対応

ここで取りあげる語は、朝鮮語の p・p'・p^h・b・b'・m の音が古代中国語の p・p^h・b・m の音と対応するとともに、朝鮮語の l・r 音が古代中国語の l・r 音と対応している語である。しかし、このような音韻対応を示す語はきわめてわずかしか存在しない。

㊦ 披 (p^hiar>p^hi, ㊦㊦ヒ)「ひらく」

㊦ hɔ:l「ひらく・あく・はじける・さける・われる」

hɔlli-「(口を)あける・ひらく・(手足を)ひろげる」

hɔ:ɾɔdʒi-「ひろがる・すきまができる」

hɔl「のはら(野原)」

㊦ 開く (ɸiraku)

広く (ɸirogu)

広し (ɸirosi)

原 (ɸara)

平 (ɸira)

◆ 朝鮮語 hɔ:ɾɔdʒi- の -dʒi- は自動詞化接辞である。なお、朝鮮語 hɔl と日本語 ɸara は「ひらけたところ」というのが原義であろう。

㊦ 風 (phiuəm>fəŋ, ㊦㊦フウ・フ, ㊦㊦ホウ)「かぜ」

飛 (piuər>fei, ㊦㊦ヒ)「とぶ・とばす」

㊦ 朝 hɔaram「かぜ(風)」

hɔ:l「(風が)ふく, (いきを)ふく・(笛などを)ふく」

◆ これらの語はもともと、風などが「ふるふる」あるいは「ふるんふるん」とゆれ動くさまを表す一種の擬態語であったと考えられる。

㊦ 沸 (piuər>fei, ㊦㊦ヒ)「わく」

㊦ p^hɔlp^hɔl「(湯などが沸騰するさま)ぐらぐら」

◆ これらの語も、湯などが沸騰してゆれ動くさまを表す擬態語であったと考えられる。

㊦ 播 (puar>pō, ㊦㊦ハ)「まく・ちらす・ちる」

㊦ p^huri-「(雨・雪などが)ふりつける・ふりまく・ふりかける・まきちらす」

㊦ 降る (ɸuru)

払ふ (ɸaraɸu), 祓ふ (ɸaraɸu)

震ふ (ɸuruɸu), 振ふ (ɸuruɸu)

◆ これらも、もののゆれ動くさまを表す擬態語としてはじまった語であると考えられ

る。「ぱらぱら (parapara)」や「ほろほろ (ΦoroΦoro)」などもこれらと同源の形態である。

㊦ 罷 (bār>pà, ㊦べ, ㊦ハイ)「やめる・やむ・おわる」

㊦ ma:l-「やめる・中止する・中断する」

◆ b音とm音は交替が起こりやすい音である。

㊦ 麦 (mluǝk>mài, ㊦ミャク, ㊦バク)「ムギ」

㊦ mil「コムギ」

ḥori「ムギ」

㊦ 麦 (mugi)

◆ 朝鮮語の mil は、古代中国語 mluǝk の ml- に対応する形態であろう。一方、日本語の mugi は中国語の中古音（随・唐の時代の音）である muək を借用したものであると考えられる。

㊦ 弥 (miēr>mí, ㊦ミ, ㊦ビ)「わたる・あまねし・とおい」

㊦ mo:l-「とおい・はるかだ・はなれている」

mo:li「とおく・はるかに」

㊦ 遙 (Φaru)

遙か (Φaruka)

遙遙 (Φarubaru)

◆ これらの語は上記の「開く (Φiraku)」や「原 (Φara)」と同源であり、本来の p 音が日本語では Φ 音になり、中国語と朝鮮語では b 音を経て m 音になったのではないかと考えられる。

1.5. 舗 (pag)・貿 (mog) などとの対応

朝鮮語の p・p^h・ḥ・m の音が古代中国語の p・b・m の音と対応するとともに、朝鮮語の k・k'・ŋ の音が古代中国語の k・g・n の音と対応しているいくつかの語がある。p・b・m の音が k・g・ŋ・n などの音と同様に交替が起こりやすいものであることはいずれの言語においても同じである。

㊦ 舗 (pag>pū, ㊦フ, ㊦ホ)「くらう・くらわす・やしなう」

㊦ mok-「くう・たべる」

ḍzabamok-「(動物をとらえて肉を) たべる」

◆ 朝鮮語 ḍzabamok- の ḍzaba- は次の語と同源であろう。

啖 (dam > tàn, 呉ダム, 漢タム) 「くらう・くう・くわす」 ↔ 食ぶ (tabu)
 ちなみに、日本語の「食ぶ (tabu)」は「賜ふ (tamaφu)」の転じたものであると言
 われているが、これは見当違いであろう。

㊦ 哺 (bag > pǔ, 呉ブ, 漢ホ) 「ふくむ」

抱 (bog > pào, 呉バウ, 漢ハウ) 「いだく・だく」

墓 (mag > mù, 呉モ, 漢ボ) 「はか」

朝 boguni 「(竹・萩であんだ) かご (籠)」

㊦ 箱 (φako)

墓 (φaka)

含む (φukumu)

育む (φagukumu)

◆ 日本語の φagukumu を「ハ (羽) ククミ (含) の意」(『岩波古語辞典』) と見るの
 は見当違いである。φagu- は古代中国語の bag などと同源であり、-kumu は次の組
 みあわせの語と同源であろう。

含 (həm > xán, 呉ゴム, 漢カム) 「ふくむ」 ↔ 籠む (kömu)

なお、日本語の φukumu は φuku- と -kömu とが複合した *φukukömu が縮まった形
 かもしれない。

㊦ 薄 (bak > pó・páo, 呉バク, 漢ハク) 「うすい・うすくなる」

朝 muk- 「みずっぱい・うすい」

㊦ 仄か (φönöka)

◆ 日本語の φönöka については前稿でもふれた。この語の φ 音は p 音に由来する音で
 あると考えられる。

㊦ 避 (bieg > pì, 呉ビ, 漢ヒ) 「さける」

朝 bi:k- 「どく・よける・のける・うつす・さける・よける」

㊦ 質 (mog > mào, 呉ム・モ, 漢ボウ) 「もとめる・あきなう・かえる・かわる」

朝 bak'- 「かえる・交換する・とりかえる」

㊦ 分 (piuən > fən, 呉漢フン) 「わける・わかれる」

朝 mok 「わけまえ・わりあて・取り分」

㊦ 分く (waku)

◆ 日本語 waku の w 音は φ 音に溯り、φ 音は p 音に溯ると推定される。

- ㊦ 表 (piog > piāo, ㊦㊦へウ) 「おもて・あらわす・あらわれる」
 ㊦ bak 「そと (外)」
 ㊦ 外 (ɸoka)
 ◆ 日本語の ɸoka について「カはアリカ・スミカのカに同じで場所の意」(『岩波古語辞典』) と見るのは見当違いである。

- ㊦ 漂 (p^hiog > piāo, ㊦㊦へウ) 「ただよう・ただよわす」
 ㊦ p^huŋgi- 「ただよう・ただよわす・におう・におわす」
 ◆ 朝鮮語 p^huŋgi- の -gi- の由来は不詳である。もとは動詞語尾であったかもしれない。

- ㊦ 覆 (p^hiog > fū, ㊦フ, ㊦フウ) 「おおう」
 佩 (buəg > pèi, ㊦バイ, ㊦ハイ) 「おびる・はく」
 ㊦ p^huk 「(物を顔からすっかりかぶるさま) すっぽり」
 ㊦ 履く (ɸaku), 着く (ɸaku), 穿く (ɸaku)

1.6. その他の語との対応

ここまでは同源の語の組みあわせを類似した形態ごとに分けて示してきたが、本節の最後にあげるのはそのような分類の外にある少数の語の寄せ集めである。

- ㊦ 味 (miuəd > wèi, ㊦ミ, ㊦ビ) 「あじ・あじわい」
 ㊦ mat 「あじ・あじわい」
 ㊦ 味 (adi)
 ◆ 日本語の adi は語頭の m 音が消失した形であろう。
- ㊦ 未 (miuəd > wèi, ㊦ミ, ㊦ビ) 「まだ～しない・まだ～でない」
 ㊦ mitʃ^ho 「まだ・そこまでは」
 ㊦ 未 (mada)
 ◆ 日本語の mada は「未だ (imada)」の転と見られているが, imada は「今 (ima)」と「未 (mada)」の複合形 *imamada が縮まった形であろう。

- ㊦ 沫 (muat > mò, ㊦マツ・マチ, ㊦バツ) 「あわ・やむ」
 ㊦ mot- 「(雨や雪などが) やむ・あがる・おさまる」

- ㊦ 外 (ɲuad > wài, ㊦グエ, ㊦グワイ) 「そと・ほか」
 ㊦ ɢot 「おもて (表)・そと (外)・外側・表面」

㊦ 会 (huad>xuì, 呉エ, 漢クワイ) 「あつまる・あつめる・あつまり」

朝鮮 gɔdu- 「あつめる」

㊦ 後 (hug>xòu, 呉グ, 漢コウ) 「あと・うしろ・しり」

朝鮮 guŋduŋi 「しり (尻)」

◆ 朝鮮語 guŋduŋi の -duŋi は次の語と同源である。

臀 (duən>duən>t^hún, 呉ドン, 漢トン) 「しり」

㊦ 依 (·iər>yī, 呉エ, 漢イ) 「よる・よりかかる・たよりにする」

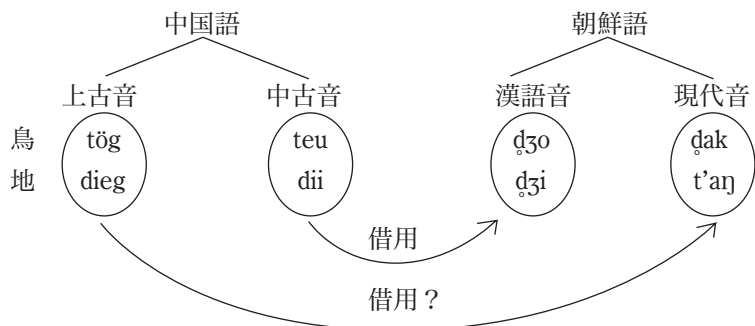
朝鮮 iro 「(手段を表して) ～で・(方向を表して) ～に・へ・(原因を表して) ～により」

㊦ 依る (yoru)

～より (yori), ～ゆり (yuri), ～ゆ (yu)

◆ 日本語の yu は yuri の -ri が消失した形であると考えられる。

本節で取りあげた語は、意味と形態がよく似ている朝鮮語と中国語、およびそれらと同源と見なされる日本語である。ここに示した朝鮮語の多くは古代中国語との間に著しい類似性が認められるので、中国語からの借用語であると思われるかもしれないが、いわゆる漢語ではない。それらはいずれも、固有の朝鮮語と見なされている語である。なぜそのように見られてきたかと言えば、漢語の多くは隋と唐の時代の中国語、すなわち中古漢語から借用されたからである。そしてまた、ここにあげた朝鮮語の発音は中国語の中古音とは似ていないからである。つまり本節で取りあげた中国語に関して言えば、その中古音は上古音にあった語末子音をことごとく失ってしまったから似ていないのである。一方、古代中国語音、すなわち日本の弥生時代とほぼ重なる周・秦・漢の時代の上古漢語の発音とはそっくりである。したがって借用が行われたとすれば、そのころのことであつたと言わなければならない。このことは、たとえば次のように「鳥」と「地」という中国語の上古・中古音を対応する朝鮮語の発音と比べてみれば容易に納得されるであろう。



ここに例示したように、固有の朝鮮語と見なされてきたものの中に中国語上古音に類似した音を有する語が数多く見つかる。従来の研究において一瞥もされなかったこの事実、むしろ盲点であったと言うべきこの事実を見て、見ぬふりをしているわけにはいかない。またこれを見て、偶然の一致として屑箱に放り投げるわけにはいかない。そうするには、一致している語の数が多すぎるからである。

2. 中古漢語を借用した可能性

固有の朝鮮語であると一般に受けとめられてきたものの中に、前節で取りあげたものとは異なる扱いをしなければならない語が存在する。それらは、随・唐の時代の中古漢語が借用されたかもしれない語である。「かもしれない」とここで言うのは、本節で取りあげる中国語の上古音と中古音はよく似ており（語によっては同形である）、それゆえに対応する朝鮮語が上古漢語を借用したものか、あるいは中古漢語を借用したものか、あるいは本当の意味での固有語であるかをすぐには判断できないからである。以下にあげる朝鮮語はおしなべてそのような語である。なお本節では、中国語の発音を「上古音＞中古音＞現代音（北京語）」というふうに中古音をも含めて示す。

2.1. 琢 (tŭk>tək)・洞 (duŋ>duŋ) などとの対応

ここに示すのは、朝鮮語の t'・d・d₃・s などの音が中国語の t・ts・d・s などの上古音・中古音と対応するとともに、朝鮮語の k・g・ŋ・n などの音が中国語の k・ŋ・n などの上古音・中古音と対応している語である。

㊦ 滴 (tek>tek>tī, ㊦(漢)チャク, ㊦(漢)テキ)「したたる・したたり」

㊦ t'ok「(水滴がおちるときの音またそのさま) ぽつり・ほとり・ぽつぽつ」

㊦ 雫 (siduku)

露 (tuyu)

梅雨 (tuyu)

- ◆ 日本語の siduku は、同源の語を重ねた *sikuduku の -ku- が -φu- に弱化した後に消失した形であると推定される。また、tuyu というのは本来の k 音が y 音に転じて生まれた形態であると考えられる。

㊦ 脰 (taŋ>taŋ>tɕaŋ, ㊦(漢)チャウ)「ふくれる」

㊦ t'uŋt'uŋ-「ふとっている」

- ◆ 朝鮮語の t'uŋt'uŋ- は -hada という動詞語尾をとる。

㊦ 頂 (teŋ>teŋ>tŋ, ㊦チャウ, ㊦テイ)「いただき・いただく」

㊦ k'okt'egi「頂上・てっぺん」

㊦ 頂 (itadaki), 頂く (itadaku)

- ◆ 日本語の itadaki・itadaku は -daki・-daku の部分が中国語の teŋ や朝鮮語 k'okt'egi の -t'egi に対応する形である。ita- は「至る (itaru)」の ita- と同様に語頭の t 音あるいは s 音を消失させた形であり、「終極・最後」を意味する「とど (todo)」や「いたる・極点」を意味する中国語「至 (tied>tʂi)」と同源である。一方, 朝鮮語 k'okt'egi の k'ok- は次の中国語と同源である。

高 (kɔŋ>kau>kāo, ㊦㊦カウ)「たかい」

朝鮮語の k'ok- は中古漢語の kau を借用したものではありえない。したがって, -t'egi もおそらく中古漢語の teŋ を借用したものではない。

㊦ 正 (tieŋ>tʂieŋ>tʂəŋ, ㊦シャウ, ㊦セイ)「ただしい・ただす・まさに・まさしく」

㊦ t'ok「ちょうど・ぴったりと・まったく・まさしく」

㊦ 正し (tadasi)

- ◆ 日本語 tadasi の tada- は, 前に述べたように, 同源の語を重ねた *takudaku- が *taɸudaɸu- を経て形成された形であると推定される。-si は言うまでもなく形容詞語尾である。

㊦ 中 (tɕioŋ>tɕioŋ>tʂōŋ, ㊦㊦チウ)「なか・うち」

㊦ so:k「なか (中)・うち (内)」

㊦ 中 (naka)

- ◆ 日本語の naka は同源の語を重ねた *sanasaka から語頭の sa- と語中の -sa- が消失した形であろう。

㊦ 琢 (tŭk>tɔk>tʂuó, ㊦㊦タク)「みがく・たたく」

㊦ ㊦ dak-「みがく」

㊦ 柝 (tʰak>tʰak>tʰuò, ㊦㊦タク)「さく・ひらく」

㊦ ㊦ tʰāk>tʰāk>tʂx̣, ㊦㊦チャク, ㊦㊦タク)「さく・たたきわる・さける・われる」

㊦ tʂʰoge-「さく・わる・分割する」

㊦ 割く (saku), 裂く (saku)

㊦ 錯 (tʰak>tʰak>tʰuò, ㊦㊦サク)「まじる・まじわる」

㊦ sok-「まぜる・まぜあわせる・まじえる」

㊦ 櫛 (tuok>tiok>tsú, ㊦トク, ㊦チョク)「おの」

㊦ do:k' i「おの(斧)」

㊦ 総 (tsuŋ>tsuŋ>tsǝŋ, ㊦ス, ㊦ソウ)「ふさ・あつめる・あつまる・すべて」

㊦ sonji「ふさ(房)・輪・片」

㊦ 常 (dhiaŋ>ʒiaŋ>tsʰaŋ, ㊦ジャウ, ㊦シャウ)「つね・つねに」

㊦ ㄝ:ndʒena「いつも・つねに」

㊦ 常 (tune)

常 (tökö)

永久 (tökösiϕë)

- ◆ 日本語の tökösiϕë を「床石(とこし)上(へ)の意。岩の上にあって不変の意から永久・絶えずの意」(『岩波古語辞典』)とする考えには賛成できない。-siϕë は古代中国語の dhiaŋ などと同源の縄文時代以来の形態と見るべきであろう。古代中国語の k・g・ŋ などの音が古代日本語の ϕ・w・y などの音とも対応することはすでに指摘したとおりである。なお、朝鮮語 ㄝ:ndʒena の ㄝ:n- は次の語と同源であろう。

恒 (fiəŋ>fiaŋ>kəŋ, ㊦ゴウ, ㊦コウ)「つね・つねに・つねとする」

㊦ 盛 (dhieŋ>ʒieŋ>ʒəŋ, ㊦ジャウ, ㊦セイ)「さかん・さかる・さかり」

㊦ hantʰaŋ「さかり・最盛期」

㊦ 盛る (sakaru)

栄ゆ (sakayu)

- ◆ 朝鮮語 hantʰaŋ の -tʰaŋ の部分が古代中国語の dhieŋ や日本語の saka- に対応する。hantʰaŋ の han- は次の語と同源であろう。

栄 (fiuěŋ>fiuAŋ>rón, ㊦ヤウ, ㊦エイ)「さかえる・さかえ・さかん」

旺 (fiuaŋ>fiuaŋ>wàŋ, ㊦㊦ワウ)「さかん」

㊦ 崇 (dzioŋ>dziuŋ>tsʰóŋ, ㊦ズウ, ㊦シュウ)「たかい・あがめる」

㊦ ut'uk「(高くそびえ立つさま)ぐっと・にゅっと・によきっと」

㊦ 高し (takasi)

崇む (agamu)

- ◆ これらの語は先の 1.1. に示した朝鮮語の tʰuk「突きでるさま)ひょこっ・ぼこっ・つくん」などと同源である。朝鮮語の ut'uk は同源の語を重ねた *t'ukt'uk のような形に溯ると考えられる。また、日本語の agamu は *tagamu>*sagamu>agamu のような変化をたどったと推定される。

㊦ 淀 (dzük > dzok > t̚suó, ㊦ザク, ㊦サク) 「ぬれる・ぬらす」

㊦ d̚ʒokʃ'i- 「ぬらす」

㊦ 濡る (nuru)

- ◆ 日本語 nuru の nu- は古代中国語 dzük の -k に対応する音である。つまり, nuru は dzük の dzü- に対応する語頭のサ行音が消失し, 語末に動詞語尾の -ru が付せられた形であると考えられる。なお, 朝鮮語 d̚ʒokʃ'i- の -ʃ'i- は他動詞化接辞である。

㊦ 全 (dziuan > dziuən > t̚ʰuán, ㊦ゼン, ㊦セン) 「まったく・すっかり・全部」

㊦ t̚hɔŋ 「まるまる・すべて・全部」

- ◆ 「薄曇り」を意味する枕詞「ひなくもり (hinakumori)」に対応する語として, 「一面にわたる雲」を意味する「たな雲 (tanagumo)」, また「一面に曇る」を意味する「たな曇る (tanagumoru)」という語があったが, これらの語における tana- は古代中国語 dziuan や朝鮮語 t̚hɔŋ と同源である。「タナはタナ (棚) と同根」(『岩波古語辞典』) と見るのは誤っている。

㊦ 束 (siuk > ʃiok > ʃù, ㊦ソク, ㊦シヨク) 「たばねる・たば」

㊦ d̚ʒuk 「(衣類・器などを 10 束一組に数える語) たば (束)」

2.2. 浸 (tsiəm > tsiəm)・拾 (dhiəp > ʒiəp) などとの対応

ここでは, 朝鮮語の d̚・d̚ʒ・d̚ʒ・s の音が中国語の t・th・ts・tsʰ・d・dh の音と対応するとともに, 朝鮮語の m・p の音が中国語の m・n・p の音と対応している語を取りあげる。

㊦ 淡 (dam > tàn, ㊦ダム, ㊦タム) 「あわい・うすい」

㊦ d̚omd̚om- 「(味が) うすい・みずっぽい」

- ◆ 朝鮮語の d̚omd̚om- は -hada という動詞語尾をとる。

㊦ 担 (tam > tam > tàn, ㊦㊦タム) 「かつぐ荷物」

㊦ d̚im 「荷・荷物」

㊦ 浸 (tsiəm > tsiəm > t̚çin, ㊦㊦シム) 「しみる・ひたす」

㊦ d̚ʒom 「しみ」

d̚ʒamgi- 「(水に) つける・ひたす」

㊦ 浸む (simu)

染む (sömu), 初む (sömu)

- ◆ 朝鮮語 d̚ʒamgi- の -gi- の由来は不詳。先にあげた p̚h̥uŋgi 「ただよ・ただよわす・

におう・におわす」の -gi- と同様に、もとは動詞化接辞であったのかもしれない。

㊦ 寝 (ts^hiəm>ts^hiəm>tɕ^hin, ㇰㇰシム)「ねる・ねむる・ねむり」

㊦ dʒam「ねむり・睡眠」

dʒa-「ねる・ねむる」

dʒeu-「ねむらせる・ねさせる・ねかす」

㊦ さ寝 (sanu)

寝る (neru)

◆ 朝鮮語の dʒa- と dʒeu- は -m が消失した形であろう。日本語 sanu の sa- が接頭辞でなかったことについてはすでに述べた。また, neru という形が語頭の sa- が失われ、動詞語尾の -ru が付加されたものであることについてもすでに述べた。

㊦ 沈 (diəm>ɕiəm>tɕ^hɔn, ㇰㇰヂム, ㇰㇰチム)「しずむ・しずめる」

㊦ dʒamgi-「しずむ・ひたる・つかる」

㊦ 沈む (sidumu)

◆ これらの語は上記の朝鮮語 dʒamgi-「(水に) つける・ひたす」などと同源であろう。なお日本語の sidumu は、同源の語を重ねた *simudumu の -mu- が消失した形であろう。「シヅはシヅカ(静)のシヅと同根。下に落ちて動かない意」(『岩波古語辞典』)と見るのは正しくない。なお、朝鮮語 dʒamgi- の -gi は自動詞化接辞である。

㊦ 単 (tan>tan>tān, ㇰㇰタン)「ひとえ・ただひとつ」

㊦ ㇰa:man「ただ・ひとえに・もっぱら」

㊦ 珍 (tien>tiēn>tɕɔn, ㇰㇰチン)「めずらしい」

㊦ ㇰimundimun「まばらに・ちらほら・ところどころに」

ㇰimul-「めずらしい・まれだ・めったにない」

◆ 朝鮮語の ㇰimul- は、ㇰim- に、日本語の「稀 (mare)」や「疎ら (mabara)」の -bara に対応する mul- が付加された形であると推定される。

㊦ 呑 (t^hən>t^hən>t^hun, ㇰㇰトン)「のむ」

㊦ samk^hi-「のみこむ・のみくです」

㊦ 呑む (nōmu)

◆ 日本語 nōmu は、古代中国語 t^hən- の t^hə- や朝鮮語 samk^hi- の sa- に対応する sa- が失われ、語末に動詞語尾の -mu が付加された形であろう。なお、朝鮮語 samk^hi- の -k^hi- の由来は不詳である。

㊦ 畳 (dāp>dep>tié, ㊦デフ, ㊦テフ) 「かさねる・かさなる・たたむ」

㊦ dʒɔp- 「おる・おりたたむ・おりかさねる」

㊦ 畳む (tatamu)

◆ 日本語の tatamu は、同源の語を重ねた *taputapu>*tamutamu が縮まった形であると考えられる。

㊦ 捷 (dziap>dziep>tcie, ㊦ゼフ, ㊦セフ) 「はやい・すばやい」

㊦ dʒep'ari- 「すばやい・敏捷だ」

㊦ 速やか (sumiyaka)

◆ 朝鮮語 dʒep'ari- の -ri- の由来は不詳。日本語の sumiyaka は、sumi- の部分が中国語の dziap や朝鮮語の dʒep' a- に対応する。-yaka は状態名詞をつくる語尾である。

㊦ 執 (tiəp>tʃiəp>tʃí, ㊦㊦シフ) 「とる・にぎる」

拾 (dhiəp>ʒiəp>ʒí, ㊦ジフ, ㊦シフ) 「ひろう」

㊦ dʒap- 「つかむ・にぎる」

㊦ 拾ふ (φiroφu)

◆ 日本語 φiroφu の φi- は古代中国語 dhiəp の -p に対応する形態である。つまり、dhiəp の dhiə- に対応する形態が失われたものであると推定される。そして、φiroφu の -roφu は「逆らふ (sakaraφu)」や「食らふ (kuraφu)」などにおける動词语尾 -raφu と同類であると見なされる。

2.3. 逢 (biuŋ>bioŋ)・明 (miǎŋ>mɿŋ) などとの対応

ここで取りあげるのは、朝鮮語の p^h・b・b̥・p の音が中国語の上古・中古音 p・p^h・b・m と対応するとともに、朝鮮語の k・k^h・g・ŋ・n の音が中国語の上古・中古音 k・g・ŋ・n と対応している語である。

㊦ 縛 (biuak>biuak>fù, ㊦バク, ㊦ハク) 「しばる」

㊦ muk- 「たばねる・たばねてしばる・しばる」

㊦ 防 (biuaŋ>biuaŋ>fán, ㊦バウ, ㊦ハウ) 「ふせぐ・ふせぎ」

妨 (p^hiuəŋ>p^hiuəŋ>fán, ㊦㊦ハウ) 「さまたげる」

㊦ mak- 「さえぎる・ふさぐ・つめる・とじる・せきとめる」

㊦ 逢 (biuŋ>bioŋ>fán, ㊦ブ, ㊦ホウ) 「あう」

㊦ manna- 「あう・であう・でくわす」

㊦ 平 (biǎŋ > biΛŋ > p^hiŋ, ㊦ヒャウ, ㊦ヘイ) 「たいら・たいらかにする」

㊦ ɸanban- 「たいらだ・なだらかだ・なめらかだ」

◆ 朝鮮語 ɸanban- は -hada という語尾をとる。

㊦ 繁 (biuǎn > biuΛn > fán, ㊦ボン, ㊦ハン) 「しげる・しげし・回数がおおい」

㊦ ma:n- 「おおい・たくさんだ・ゆたかだ」

ma:ni 「おおく・たくさん・よく・しばしば」

㊦ まねし (manesi)

◆ 日本語の manesi は「回数がおおい・たびかさなる」を意味する形容詞で, -si はその語尾である。

㊦ 暴 (buok > buk > p^hù, ㊦ボウ, ㊦ホウ) 「さらす・あらわす」

㊦ p^hanɛ- 「ほりだす・あばぎだす」

㊦ 棒 (bǔŋ > boŋ > pàŋ, ㊦バウ, ㊦ハウ) 「ぼう・うつ」

木 (muk > muk · mbuk > mù, ㊦モク, ㊦ボク) 「き」

㊦ makt'egi 「ぼう (棒)・ぼうきれ」

◆ 朝鮮語 makt'egi の -t'egi は、次の組みあわせの語と同源である。

樹 (dhiug > ʒiu > ʒù, ㊦ジュ・ズ, ㊦シュ) 「き」 ↔ 木 (kǐ)

-t'egi は中古漢語の ʒiu を借用したものではないことが明白である。したがって、mak- も中古漢語 buk の借用語ではない可能性が高い。ちなみに、日本語の ki は古代中国語 dhiug の -g に対応する形、つまり dhiug の dhiu- に対応する音が消失した形である。

㊦ 扑 (p^huk > p^huk > p^hü, ㊦㊦ホク) 「うつ」

㊦ ɸak- 「うつ・うちこむ・さしこむ・つつこむ」

㊦ 盲 (mǎŋ > mΛŋ > mán, ㊦ミャウ, ㊦マウ) 「めくら・めしい・くらい」

茫 (maŋ > naŋ · mbaŋ > mán, ㊦マウ, ㊦バウ) 「心がぼんやりしているさま」

㊦ mag 「むやみに・やたらに・しきりに」

㊦ 明 (miǎŋ > miΛŋ > míŋ, ㊦ミャウ, ㊦メイ) 「あきらか・あかるい・あける・あけ」

㊦ mak- 「すんでいる・きれいだ・きよい・さえている」

㊦ 明く (aku), 開く (aku)

明かし (akasi)

- ◆ 日本語の *aku* や *akasi* は語頭の *m* 音が消失した形である。これらの語は「赤 (*aka*)」や「朱 (*akē*)」と同源であるという見方が定説となっているが、*aka*・*akē* は *s* 音を消失させた形であり、中国語との間に次のような対応関係が認められる語である。

赤 (*tʰiak* > *tʰiek* > *tʰi*, 興シャク, 漢セキ) 「あか・あかい」 ↔ 赤 (*aka*)

朱 (*tiug* > *tʃiu* > *tʃū*, 興ス, 漢シュ) 「あか・あけ・あかい」 ↔ 朱 (*akē*)

中 命 (*miēŋ* > *miΛŋ* > *mìŋ*, 興ミャウ, 漢メイ) 「いのち」

朝 *moks'um* 「いのち・生命」

- ◆ 朝鮮語 *moks'um* の *-s'um* は次の語と同源であろう。

生 (*sieŋ* > *sīΛŋ* > *ʃɿŋ*, 興シャウ, 漢セイ) 「いきる」 ↔ 生く (*iku* < **siku*)

中 紋 (*miuən* > *miuən*・*mbiuən* > *wón*, 興モン, 漢ブン) 「模様」

朝 *munii* 「模様・柄・紋」

2.4. 筆 (*piet* > *piēt*)・没 (*muət* > *muət*・*mbuət*) などとの対応

ここで取りあげるのは、朝鮮語の *pʰ*・*ɸ*・*m* の音が中国語の上古・中古音 *p*・*m* と対応するとともに、朝鮮語の *t*・*tʰ* の音が中国語の上古・中古音 *t*・*d* と対応している語である。このような音韻対応を示す語の組みあわせはわずかしかない。

中 筆 (*piet* > *piēt* > *pī*, 興ヒチ, 漢ヒツ) 「ふで」

朝 *ɸut* 「ふで (筆)・毛筆」

日 筆 (*ɸude*)

- ◆ 日本語の *ɸude* を「フミテ (文手) の転」(『岩波古語辞典』) と見るのは不適切。

中 発 (*piuāt* > *piuΛt* > *fā*, 興ハチ, 漢ハツ) 「はなつ・出発する」

朝 *ɸutʰi-* 「(郵便局で手紙などを) だす・おくる」

ɸutʰɔ 「～から」

日 解く (*ɸodoku*)

- ◆ 日本語の *ɸodoku* は *ɸodo-* に動詞語尾の *-ku* が付いた形である。また、この語の本来の意味は「ときはなつ・ときはなたれる」である。ちなみに、この語は「迸る (*ɸodoɸasiru* > *ɸotobasiru*)」の *ɸodo-*・*ɸoto-* と同源であると考えられる。

中 勿 (*miuət* > *miuət* > *mbiuət* > *wù*, 興モチ, 漢ブツ) 「なかれ・ない」

朝 *mot* 「～できない・～れない」

- ㊦ 没 (muət > muət · mbuət > mò, ㊦モチ・モツ, ㊦ボツ) 「しずむ・つぎる・かくす」
 ㊦ p^hamut- 「(掘ってその中に) うめる・かくす・ほうむる」
 ◆ 朝鮮語 p^hamut- の p^ha- は次の語と同源かもしれない。
 扒 (? > puɿ > pá, ㊦へ, ㊦ハイ) 「ほる・ほりおこす」

2.5. 失 (thiet > ʃiēt) ・ 雪 (siuat > siuēt) などとの対応

ここに取りあげるのは、朝鮮語の t · d · ʈ · dʒ · s' の音が中国語の上古・中古音 t · t^h · th · s と対応している三つの組みあわせの語にすぎない。

- ㊦ 失 (thiet > ʃiēt > ʃī, ㊦シチ, ㊦シツ) 「うしなう・するりとなくなる」
 ㊦ dʒat- 「(蒸発したり染みこんだりして) へる・少なくなる・なくなる」
 ㊦ 失す (usu)
 失ふ (usinaɸu)
 ◆ 日本語では、中国語の上古・中古音 th · ʃ に対応する s 音が失われている。なお、usinaɸu の -naɸu は「商ふ (akinaɸu)」などにおける -naɸu と同じ動詞語尾である。

- ㊦ 出 (t^hiuət > t^hiuēt > tʂ^hū, ㊦スチ, ㊦シュツ) 「でる」
 ㊦ ʈot- 「(日が) のぼる・(月が) でる・(芽などが) でる」
 t^hi- 「(月・日が) でる・のぼる・あがる」
 sot- 「つきでる・とびだす・(月や太陽が) でる・のぼる・そびえる」
 ㊦ 出づ (idu)
 出る (deru)
 ◆ 朝鮮語の t^hi- は、古代中国語 t^hiuət の t^hiuə- に対応する形である。そして、日本語の idu は同じ t^hiuət の t^h- に対応する音が失われた形であり、deru は t^hiuət の t^hiuə- に対応する音が失われるとともに、語末に動詞語尾の -ru が付加された形である。

- ㊦ 雪 (siuat > siuēt > ɕuě, ㊦セチ, ㊦セツ) 「ゆき・ゆきがふる・すすぐ・そそぐ」
 ㊦ s'ot- 「こぼす・ぶちまける・そそぐ・(涙や血を) ながす」
 s'odadži- 「こぼれる・ふりそそぐ・ほとぼしる・ながれおちる」
 ◆ 朝鮮語 s'odadži- の -dʒi- は自動詞化接辞である。

2.6. 逆 (ɲɿăk > ɲɿɿk) ・ 玄 (fiuān > fiuen) などとの対応

ここでは、朝鮮語の k' · ɡ · n という語頭音が中国語の k · ɡ · ɲ · n · fi という上古・中古音と対応するとともに、朝鮮語の k' · ɡ · ɲ · n · m という語末音または語幹末音が中国語の k ·

g・ŋ・n という上古・中古音と対応している語を取りあげる。

- ㊦ 勁 (kieŋ > kieŋ > tɕiɛŋ, ㊦ キャウ, ㊦ ケイ) 「つよい・つよく張ったちから」
 剛 (kaŋ > kaŋ > kân, ㊦ カウ, ㊦ ガウ) 「かたい・つよい・つよさ」
 強 (giaŋ > giaŋ > tɕiáŋ, ㊦ ガウ, ㊦ キャウ) 「つよい・つよめる」
 頑 (ŋuǎn > ŋuǎn > wán, ㊦ グェン, ㊦ グワン) 「かたくな」

㊦ giun 「ちから (力)」

㊦ 頑 (katakuna)

- ◆ 日本語 katakuna の kata- は「固し (katasi)」の kata- と同源であり、-kuna は上記の中国語 ŋuǎn などと同源である。「クナは、曲がっていること。クネリと同根」(『岩波古語辞典』)と見るのは見当違いであろう。

㊦ 卷 (kuan > kuen > tɕuǎn, ㊦ クェン, ㊦ クワン) 「まく」

捆 (k^huən > kǔn, ㊦ ㊦ コン) 「しばる」

㊦ ga:m- 「まく」

gamgi- 「まかれる・まきつく」

㊦ 組む (kumu)

- ◆ 日本語の「雲 (kumo)」や「蜘蛛 (kumo)」などもこれらの語と同源であろう。「米 (kömë)」という語もこれらと同源で、「籾殻につつまれたもの」というのがその原義であったと考えられる。

㊦ 間 (kǎn > kǎn > tɕiǎn, ㊦ ケン, ㊦ カン) 「あいだ」

㊦ gaunde 「なか (中)・あいだ (間)」

- ◆ 朝鮮語 gaunde の -de の由来は不詳である。

㊦ 逆 (ŋiǎk > ŋiǎk > nì, ㊦ ギャク, ㊦ ゲキ) 「さからう・さかさま」

㊦ gɔk'uro 「逆に・さかさまに」

- ◆ 朝鮮語 gɔk'uro の -ro は副詞を形成するための後置詞である。

㊦ 項 (fiuŋ > fiuŋ > ɕiǎŋ, ㊦ ゴウ, ㊦ カウ) 「うなじ・くび」

㊦ goge 「うなじ・えり・くび」

㊦ 項 (una)

首 (kubi)

- ◆ 日本語の una は、古代中国語 fiuŋ の fi- に対応する音が消失した形である。また、kubi は fiuŋ の -ŋ に対応する音が m 音を経て b 音に転じた形である。

㊦ 玄 (fuān > fuen > ɕuán, ㊦グエン, ㊦カウ) 「くらい・くろ・くろい」

㊦ 朝 ɣɔ:m- 「くろい」

kʰɔmkʰɔm- 「くらい・まっくらだ」

◆ 朝鮮語 kʰɔmkʰɔm- は -hada という形容詞語尾をとる。

㊦ 刈 (ɣuan > ɣuan > wán, ㊦㊦グワン) 「えぐる・けずる」

㊦ k'in- 「切断する・(電話などを) きる・(関係などを) きる・(関係などを) たつ」

k'inɔdʒi- 「(糸などが) きれる・とだえる」

◆ 朝鮮語 k'inɔdʒi- の -dʒi- は自動詞化接辞である。

㊦ 人 (nien > niēn · riēn > rén, ㊦ニン, ㊦ジン) 「ひと」

㊦ nam 「他人・ひと」

2.7. 合 (fiəp > fiəp) ・ 炎 (fiam > fiəm) などとの対応

ここで取りあげる語は、朝鮮語の ɣ 音が中国語の上古・中古音 kʰ に対応するとともに、朝鮮語の p 音が中国語の上古・中古音 p · m と対応する三つの組みあわせの語である。このような対応を示す組みあわせは次の 3 例しか見つからない。

㊦ 怯 (kʰiap > kʰiap > tɕʰiè, ㊦コフ, ㊦ケフ) 「おそれる・おじける・おびえる・ひるむ」

㊦ 朝 ɣɔp- 「おじける・おびえる・おびえ」

㊦ 怯ゆ (obiya または obiyu)

◆ 日本語 obiyu または obiyu の o- は古代中国語 kʰiap の kʰ- に対応する音、すなわち語頭子音が消失した形であり、-yu は付加された動詞語尾である。

㊦ 合 (fiəp > fiəp > xɿ, ㊦ゴフ, ㊦カフ) 「あう・あわせる」

㊦ 朝 ɣi:p- 「継ぎをあてる・継ぎあわせる・補充する・補足する」

㊦ 合ふ (aɸu)

◆ 日本語 aɸu の a- は古代中国語 fiəp の fi- に対応する音が消失した形であり、-ɸu は kʰiap の -p に対応する形である。

㊦ 炎 (fiam > fiəm > yán, ㊦㊦エム) 「もえあがる・やく」

㊦ 朝 ɣu:p- 「やく・あぶる」

㊦ くぶ (kubu)

炙る (aburu)

◆ 日本語 aburu の a- は古代中国語 fiam の fia- と対応し、-bu- は fiam の -m に対応する。

2.8. 結 (ket>ket)・日 (fiuāt>fiuΛt) などとの対応

本節の最後に、朝鮮語の k'・k^h・g の音が中国語の上古・中古音 k・k^h・ŋ と対応するとともに、朝鮮語の t・d・t^h・s の音が中国語の上古・中古音 t と対応しているいくつかの語を取りあげる。

㊦ 潔 (kāt>ket>tɕié, ㊦ケチ, ㊦ケツ) 「いさぎよい・きよい」

㊦ k'ek'it^ha- 「清潔だ・きれいだ」

◆ 朝鮮語 k'ek'it^ha- は同源の語を重ねた k'et^hak'it^ha- のような形であったと推定される。

㊦ 訖 (kiət>kiət>tɕ^hi, ㊦コチ, ㊦キツ) 「おわる・とまる・いたる」

吃 (kiət>kiət>tɕ^hi, ㊦コチ, ㊦キツ) 「どもる・どもり」

㊦ kit 「おわり・はて・おしまい」

gisik 「ふもと (麓)・はし (端)・すそ (裾)・へり (縁)・きし (岸)」

git^hi- 「とまる・とどまる・おわる」

git^him 「せき (咳)・しわぶき」

㊦ 岸・涯 (kisi)

潟 (kata)

噓 (kusame)

◆ 日本語の kisi と kata の原義は「陸地のおわり」であったと考えられる。「方 (kata)」や「片 (kata)」もこれからの語と同源であろう。

㊦ 窟 (k^huət>k^huət>k^hū, ㊦コチ, ㊦コツ) 「ほら・あな」

㊦ k^hut 「くぼみ・あな」

gudŋi 「あな・くぼみ」

◆ 朝鮮語 gudŋi は、ここに示した中国語 k^huət に対応する語と次に示す中国語 duŋ に対応する語との複合形であると考えられる。

洞 (duŋ>duŋ>tòŋ, ㊦ゾウ, ㊦トウ) 「ほら・ほらあな」 ↔ 谷 (tani)

㊦ 日 (fiuāt>fiuΛt>yuē, ㊦エツ, ㊦ヲチ) 「いう・いわく」

㊦ ilk^hot- 「〜とよぶ・いう・称する」

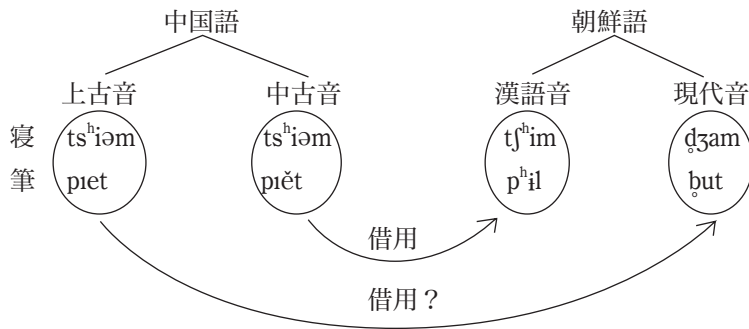
㊦ 語る (kataru)

◆ 朝鮮語 ilk^hot- の il- は「こと」を意味する形態である。日本語の kataru の -ru は、言うまでもなく付加された動詞語尾である。

本節で取りあげた朝鮮語は、中国語の上古音だけでなく中古音ともよく似ている。したがって前述したように、仮にこれらの語が固有の朝鮮語ではないとした場合、それらが中国語の

上古音を模したものか中古音を模したものか判然としない。しかし、まったく見当もつかないというわけではない。私見では、本節にあげた朝鮮語もまた、それが固有語でないとすれば、上古漢語からの借用語である。上古音と中古音が類似しているということ、あるいは同一であるということは、本節にあげた朝鮮語の成り立ちを前節にあげた朝鮮語のそれと区別する根拠とはならない。

この想定は、たとえば次のように「寝」と「筆」という中国語の発音とこれらに対応する朝鮮語の発音を比較することによっても支持される。



朝鮮語の漢語音は基本的に中国語の中古音を模したものであるから、上に示した朝鮮語漢語音 tʃʰim も中古音の tsʰiəm に由来する語であると考えられる。したがって朝鮮語現代音の d͡ʒam は、それが借用語であるとすれば、上古音の tsʰiəm に溯ると見なされる。二つの借用語が二重語 (doublet) をつくっているというわけである。同様に、朝鮮語漢語音の pʰil は中国語中古音 piət に由来し、朝鮮語現代音の bʊt は中国語上古音 piət に溯ると仮定することができる。ちなみに、中国語の語末の t 音は次のように朝鮮語の漢語音ではすべて l 音となっている。

㊤ 舌 (diat > d͡ʒiət > ㅅᄇ, ㊤ゼツ・ゼチ, ㊤セツ) 「した」

㊤ sol 「した (舌)」

㊤ 舌 (sita)

㊤ 絶 (dziuət > d͡ʒiuet > t͡ɕué, ㊤ゼツ・ゼチ, ㊤セツ) 「たつ・たえる」

㊤ d͡ʒɔl (絶)

㊤ 絶つ (tatu)

ここまでの考察が正しければ、朝鮮語は先史時代に非常に多数の語を中国語から受け入れたことになる。これはしかし、本稿で取りあげた朝鮮語が固有語ではないとしての話である。これらの語のすべてではないにしろ、一部の語が先史アジア語の系統をひく固有の朝鮮語である可能性は残されている。

3. 借用語と固有語の並存

この節では、ここまでに取りあげた朝鮮語が古代中国語から借用されたものである可能性を言語接触という観点から論じたあとで、それらの語の少なくともその一部が固有の朝鮮語であることを述べる。

3.1. 朝鮮語と中国語の接触

朝鮮語と中国語は隣接しているので、一方が他方の影響を受けてもおかしくはない。この二つの言語の場合、中国語は一方的に影響を及ぼした側であり、朝鮮語が一方的に影響を受けた側である。この関係は先史時代以来変わらなかった。

朝鮮語と古代中国語あるいは先史中国語との間に起こった言語接触はいくつかの段階に分けられる。その一つは、先史時代に中国東北地方から畠作耕作が伝来したことに伴う接触であった。池橋（2008）は次のように述べている。

朝鮮半島の農耕の歴史を見ると、それが中国の黄河流域（中原）あるいは東北の乾燥地帯の穀物農耕の影響を受けたものであることに気づく。つまり、北方の畠作穀物の栽培が優勢であったことが分かる。畠作は華北から中国の東北の遼寧地方を経て陸路によって伝えられた……。また朝鮮半島の北部では牧畜・遊牧民が大きな力を持っていた。北から牧畜と畠作が導入された半島の西北部が農耕文化の先進地帯であった。朝鮮半島の文物も、中国の東北地方の遼寧地域との共通性で彩られている。（62-4 ページ）

第二に注目すべき言語接触は、稲作耕作文化の担い手との接触を通じて起こった。通説に従えば、稲作渡来民は長江下流域から山東半島を中継して朝鮮半島南西部に入植した。中国語話者がやって来たのである。その時期は、炭素 14 年代の測定によれば、中国の歴史時代が幕明けしたころ、つまり中国の中原地域の覇者が殷から周へと代わった紀元前 11 世紀の終わりころであった。（藤尾 2011：48-9）

稲作渡来民の朝鮮半島への入植は、紀元前 10 世紀に起こったとされる日本列島への入植についても言えるのだが、二つの民族が混じりあい、二つの言語間に大規模な言語接触が起こったことを意味する。すなわち、中国語を話す弥生系日本人と固有の日本語を話す縄文系日本人との交流・混交を通じて日本語の中に大量の中国語が流入したように、朝鮮半島では在来の人びとの社会に中国語話者である稲作渡来民が溶けこむことにより、朝鮮語の中に大量の中国語が採り入れられていったにちがいないのである。（傍点をふった言葉について注釈を加えておくと、日本列島への水田稲作の伝来は朝鮮半島南部から北九州北部へのルートが想定されているけれども、それを伝えた人びとの主体は中国語話者であった。そうでなければ、先の稿で論じたように、固有の日本語と見なされているいわゆる大和言葉の多数が古

代中国語にそっくりであるということはないであろう。ちなみに、本稿の冒頭にあげた日本語もその多くは対応する古代中国語を借用したものである可能性が高い。

さて次に注目すべき言語接触は、春秋戦国時代の中国にあった燕（えん）という国と関係がある。燕は「戦国七雄の一つ」で、周の武王が弟の召公奭（しょうこうせき）を薊（けい）に封じたのにはじまり、河北省北部から南満州一帯を約 800 年にわたって治めたが、紀元前 222 年に秦によって滅ぼされた。しかし燕人の衛満（えいまん）が前漢のはじめころ北京近郊の故郷から遼東半島を経由して朝鮮半島北部に渡り、鴨緑江（おうりょくこう）兩岸の地域を支配下に治め国を建て、今の平壤あたりに都をおいた。この国は紀元前 195 年から紀元前 108 年まで続いた。この間に朝鮮語と中国語との接触が生じたことは疑いを入れない。

もう一つ両言語の接触を引き起こしたにちがいない出来事として見逃せないのは、燕人の王朝を滅ぼした漢の武帝が今の平壤にあたる地域を中心に四つの郡をおいて統治をはじめたことである。郡の一つである楽浪郡（らくろうぐん）は西暦 313 年に騎馬遊牧民族の高句麗（こうくり）に滅ぼされるまでの約 400 年間にわたって中国文化を移植し、周辺諸国に大きな影響を与えたことが知られている。朝鮮語がこの時期に中国語の語彙の一部を借用した可能性は十分にある。

以上のように、朝鮮語は先史時代以来、中国語との接触を通じてその語彙を受け入れてきたにちがいないが、具体的にどれが古代中国語からの借用語で、どれがそうではないかを決めるのはむずかしい。むしろ、ほとんど不可能に近いと言っても過言ではない。しかし、たとえば中国から伝来したであろう筆と鏡を表す朝鮮語の *but* と *goul* はそれぞれ古代中国語の *piet*（筆）と *klam*（鑑）を借用したものであるとすることができる。同様に、紙を表す朝鮮語 *d3onji* も古代中国語の *tieg*（紙）を借用したものであろう。さらにたとえば、中国を経由して伝来したコムギを表す朝鮮語 *mil* も、ムギを表す古代中国語 *mlu3k*（麦）を模した語であると考えてよい。

3.2. 先史アジア語に溯る固有語

上述のように、朝鮮語と中国語との間に大規模な言語接触を引き起こしたであろう出来事が過去に幾度も起こった。そこで、古代中国語と形態が酷似している朝鮮語は中国語を借用したものにちがいないという論も十分に成り立つ。朝鮮語と中国語が系統的に縁もゆかりもない言語であるなら、そのように見るのがあたりまえである。そのように見ることに私がためらいを感じるのは、固有の朝鮮語と目されてきた語の少なくとも一部が本当の意味での固有語であることを示す動かし難い証拠が発見されるからである。そしてこれにより、朝鮮語と中国語は同系言語ではないという常識が大きくゆさぶられるからである。

本稿ではここまで朝鮮語を中心にして、それと中国語との間、あるいは日本語との間に同源と見なされる語が多数存在することを見てきたが、これらの語の一部についてはそれと同

源の語を他の言語にも見つけることができる。たとえば、南インドで話されるタミル語（ドラヴィダ語族の一つ）とニュージーランドの原住民マオリ族が話すマオリ語（オーストロネシア語族の一つ）に、

㊦ tukai 「(白で) つく・ふみつける・(穀物を) ふんでつぶす」

㊧ tuki 「つく・うつ」

tukituki 「つく」

という語が存在するが、これらは先の 1.1. にあげた古代中国語の tog (搗)「つく・うつ」、朝鮮語の tɕ'ik-「(判などを) つく・(点などを) うつ・つける」、日本語の tuku (搗く) や tuku (築く) などと似ている。似ているのは同源であるからだと見てよい。ちなみに、これらとおそらく同源の語としてマリオ語に tok「おの(斧)」という語があるが、これは 2.1. にあげた古代中国の tuok (櫛)「おの(斧)」や朝鮮語の do:k'i「おの(斧)」と酷似している。

朝鮮語や中国語、あるいは日本語との間に著しい類似性が認められる別の例として、タミル語・マオリ語の次の語をあげるすることができる。

㊦ tār 「おちる・ひくくなる・ひくい・流れおちる・(日が) かたむく・たれさがる」

taḷar 「うなだれる・しおれる・気がとおくなる・つかれる・ゆるくなる」

㊧ tare 「つるす」

toroma 「たるんだ」

turuturu 「したたる」

これらの語は先の 1.3. で取りあげた古代中国語の duar (墮)「おちる・おとす」や dhiuar (垂)「たれる・たらす」や ter (低)「ひくい・たれる」、朝鮮語の t'orodɕi-「おちる・落下する」や ḍal-「つるす・たらす・かかげる」や tɕ'hal-「みじかい・ひくい」、日本語の taru (垂る) や tarusi・darusi (怠し) などと類似している。なお、これらと同源と見なされる語に totoro「のぼす」や toorona「のぼす」というマオリ語があるが、これらは 1.3. に示した古代中国語の ḍiar (施)「のびる・のぼす・うつす」や朝鮮語の ḡgara-「そだつ・のびる・成長する」、日本語の turu (蔓)と比較されるべきである。

朝鮮語や中国語と類似した形態を有するタミル語とマオリ語の例をもう一つ下に示しておこう。

㊦ para 「ひろがる・拡散する・たいらになる・ひろびろとしている」

viri 「ひろがる・拡大する・ひらく」

paravai 「うみ(海)・おおうなばら(大海原)」

param 「天」

㊧ puar- 「ひらく」

wihra 「のはら(野原)」

これらの語は、1.4. に示した古代中国語の p^hiar (披)「ひらく」や、朝鮮語の ḡol-「ひらく・あく・はじける・さける・われる」、ḡolli-「(口を) あける・ひらく・(手足を) ひろげる」、

hɔl 「のはら (野原)」や、日本語の ϕ iraku (開く), ϕ irogu (広ぐ), ϕ irosi (広し), ϕ ara (原), ϕ ira (平) などとよく似ている。すべて同源の語と見てよいであろう。

朝鮮語や中国語との形態的類似は、タミル語やマオリ語などの南方の言語以外にも観察される。たとえば、北方の言語の一つアイヌ語に turse 「すとおちる・墜落する・ぱたところぶ・ぼろっととれておちる」や turi 「(長く・まっすぐに) のぼす」, pirasa 「ひろげる」や poro 「おおきい・おおきくなる」という語がある。これらはすぐ上に示した朝鮮語や中国語と、またタミル語やマオリ語と非常によく似ている。またたとえば、サハリンに分布するウイльта語 (ツングース諸語の一つ) に xələlli- 「まわる」という語が存在するが、これは先の 1.2. に示した古代中国語の fiuər (回) 「まわる・まわす」や、朝鮮語の guri- 「ころがる」や、日本語の korobu (転ぶ) などと類似している。また、ウサギを表すウイльта語の tukusa (<*tukusagi あるいは *tukusaki) も、1.1. に示した古代中国語の $\text{t}^{\text{h}}\text{ag}$ (兎) 「ウサギ」、朝鮮語の $\text{t}^{\text{h}}\text{ok'i}$ 「ウサギ」、日本語の usagi (兎) と類似している。これらの語は狩猟採集者たちがはるか昔に共有していた一つの言葉に由来するものであろう。さらに、ウイльта語には galli- 「きらう・いやがる」という語があるが、これを 1.2. に示した古代中国語の filām (嫌) 「きらう・いやがる」や朝鮮語の k'ɔ:ri- 「きらう・いやがる」と、また日本語の kira ϕ u (嫌ふ) と比べてみれば、これらがタミル語の ceru (<*keru) 「にくむ・きらう」をも含めて一つの源に発したものであることが理解される。

ウイльта語の形態が先述の古代中国語・朝鮮語の形態と類似している例、ゆえに同源の組みあわせであると判断される例を下に追加しておこう。

ウ toj 「ただしい」 $\longleftrightarrow$ 中 正 (tien) 「ただしい・ただす・まさに・まさしく」
朝 t'ok 「ちょうど・ぴったりと・まったく・まさしく」

ウ cikpee- 「ぬれる」 $\longleftrightarrow$ 中 泥 (dzük) 「ぬれる・ぬらす」
朝 dʒɔkʃ'i- 「ぬらす」

ウ kallee- 「かえる・かわる」 $\longleftrightarrow$ 中 化 (xuär) 「かわる・ばける」
朝 gal- 「かえる・とりかえる」

ウ sollee- 「川上へのぼる」 $\longleftrightarrow$ 中 躋 (tser) 「のぼる」
朝 t'ɔ:ri-i 「(空中に) うかびあがる・のぼる」

ウ bookee- 「そと (外)」 $\longleftrightarrow$ 中 表 (piɔg) 「おもて・あらわす・のぼる」
朝 bak 「そと (外)」

㉔ dappee- 「つかむ・つかまえる」 ← ㉓ 執 (tiəp) 「とる・にぎる」
 ㉒ dʒap- 「つかむ・つかまえる」

このように同源と見なされる語が異なる語族にまたがって、また言語接触が起こりえなかった言語をまたいで存在するということは、これらの語が語族を仕切る境界線ができる前の形に溯るものであることを意味している。アジアの広い地域を包みこむ一つの言語がはじめにあって、それがいくつもの言語に分かれていったと想定しなければ、問題の本質を見誤ることになる。

この稿では、固有の朝鮮語と見なされてきたものの中に古代中国語あるいは先史中国語からの借用語が多く含まれている一方で、先史アジア語にまで溯る語が存在することを明らかにした。しかし、この考察はまだ終わっていない。朝鮮語と中国語との類似性、そして朝鮮語と日本語との類似性は、本稿で見てきたよりもさらに奥深いところにも隠れている。これらの言語は系統的に無縁ではない。むしろ、縁の近い言語である。次稿では、このことを音の変化と音の消失という観点から論じることになろう。

参考文献

- 池上二郎編（1997）『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会。
 池橋 宏（2008）『稲作渡来民—「日本人」成立の謎に迫る』講談社。
 大阪外国語大学朝鮮語研究室編（1986）『朝鮮語大辞典』（全2冊）角川書店。
 大野 晋編（2011）『古典基礎語辞典』角川学芸出版。
 大野 晋ほか編（1990）『岩波古語辞典』（補訂版）岩波書店。
 王 力（1997）『同源辞典』北京：商務印書館。
 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。
 藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研漢和辞典』学習研究社。
 藤尾慎一郎（2011）『〈新〉弥生時代—五〇〇年早かった水田稲作』吉川弘文館。
 日本大辞典刊行会編（1972-976）『日本国語大辞典』（全20巻）小学館。
 中村幸彦ほか編（1982-2003）『角川古語辞典』（全5巻）角川書店。
 山本健二編（2007）『日本語—マオリ語 マオリ語—日本語辞典』国際語学社。
 Burrow, T. and M. B. Emeneau (1984) *A Dravidian Etymological Dictionary*, 2nd ed. Oxford University Press. (ドラヴィダ語語源辞典日本語版編集委員会（2006）『ドラヴィダ語語源辞典』きこ書房)。

(2012年4月24日 受理)